

## 深谷シネマで『嗚呼 満蒙開拓団』を観る

芹沢 昇雄

中国・方正に中国政府が建ててくれた『日本人公墓』が在ることも、隣に『養父母の墓』が在ることも知っていたが、世間には殆どには知られてこなかったであろう。「方正友好交流の会」の大類善啓さんたちの長い間のご尽力や、この羽田澄子監督のこの映画はその認知に大きく貢献したに違いない。

誰しも知って感心するのは侵略・加害側の公墓を被害者側、しかも、政府が建てたという事であろう。しかも、見た通り非常に立派なものであり、地元の人たちが丁寧に整備までして下さっていることである。

戦争というと、誰しも被害や悲劇は訴えるが加害を忘れがちである。その、被害者が加害者に立派な公墓を建ててくれた事に私は感動するのである。

開拓団体験者も中国人が如何なる生活に追われたか知っている筈である。現に「武装移民」として武器を持って侵略したのである。

「政府の指示であり知らなかった」とは言え開拓団も中国に対しては加害の立場であったことは間違いない。しかし、中国は日本の民には責任がないと寛大措置で望んでくれたのである。日本の強制連行・労働の現場に政府が建てた慰霊碑は一つもあるまい。在っても殆どが民間やボランティアである。

もう一つ、寛大措置の現場があり、それは「撫順戦犯管理所」である。

焼き尽くし、殺し尽くし、奪い尽くしの「三光作戦」処か強姦までし、撫順戦犯管理所に収容された約 1000 人の殆どが起訴免除とされ、起訴された 45 人にも死刑も無期も無かったが、これも「日本人公墓」同様に周恩来の指示であった。

周恩来は復讐や制裁では憎しみの連鎖は切れないと「前事忘不 後事之師」の寛大措置を執ったが、ワイツゼッカー独元大統領も「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる」と全く同じ言葉を使っている。

我々日本人はこの加害者が被害者赦してくれたことを忘れてはならない。

(せりざわ・のぶお：68歳、「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」事務局次長。撫順戦犯管理所で収容された日本帝国軍人たちが周恩来総理の寛大な措置で無罪で釈放される、という奇蹟のような出来事を後世に伝えようと活動をしている)